

911.3
八

撰
詔
古今
鑑
の
部

飯名勺類

夏々部百首

春二十首

山の名のしるしとて
いふはしるしとて
いふはしるしとて



誦諧古今句鑑 秋之部

立 秋

子のあを水おたてしう蓄れあ乃
賣事ぬと候るれりもゆきを肉
嬌きぬをアそぬりり利魚の店
屋さしやれ垣が啼出すけさの秋
と秋秋とあつて門掃くことさか
ねしりや日お向あ州の秋強あ
核移り桐の葉落しと秋の秋
とと(世)とやれととと秋の妻
は内秋のむと何事さるありのり

梅一宗活存雀玉木

翁決瑞幾岳舟圃丹

初種

文月や破衣をけさるつゆ
みくや陰を感はる 故郷の門
ゆかりきやむくうはけさむたのこ
枯風るくくううとぬぬ縄しとくれ
初版や口つこくうはけつきのいろ
そり秋の狂いうくや 癖る 裾
ゆ垂や茂し一藤くく 人の旅
恙くくくや風くくくても 袖の秋
りりあうや 赤くの澄まらふ安のあ
初軒や曇ゆくくく 葉の枯散
そり秋や 物むにまをくくくく
神あきや照るくく小流に 蝶のくく

保友 其角 嵐雪 寥和 米風 蒼狐 栗堂 梅郊 孤舟 存我 素人

萩小虫秋のけりめをきりくく一 哉

吟松

一葉 桐柳

風まわりとまきのつを 桐の一葉か
湯よるふろくくや 一葉の 葉 け
けりあうくくくくくく 風の柳くく
むくくまきりくくくや 柳の整くく
くくくの色沈むくく 桐 葉 け
一葉か 柳や 老とくくく 先
淋くくくくくくくく 柳の整くく
葉柳くくくくくく 柳の整くく
葉はくくや 桐の一葉に 人くく

望一 岩翁 兔士 公雅 春郊 涼山 順翁 臨石 輕舟

初月

千秋の樂しき月夜
天の戸はまじし月夜
初しき月夜
霧の陽や
初風や
そり月や
三日の夜
三日の月
霧の夜

巨海
光景
支考
專吟
吳山
玉圃
宝馬
五廛

七夕

七夕の夜
大甲ふ夜
此の事
七夕の夜
七夕や
星合も
星も
月山吹
有る
あや
数々の
舟か

貞徳
負角
其依
乙帷
兔由
桂坊
蒼狐
伽涼
雅文
公邪
紀亮
一巴

今宵寝る編も夢む先星の夢
世小深まぬ尼の影の糸の糸
うさひを人間小あゝ早き宵
水うさのまゝして今宵やいづれ何
糸むく先星結ふひの女帝様
と〜姉も妹も振袖星々香
三琴やも向小深く想丈夫恋

寄井星恋

深倉や星もむく〜井尚

六日之陰

夕月やさ白し老の暮るゝ似凡
首尾去よ早の六日暮るゝ鳥

聖靈祭

生て居る〜とてしむし冥才利
才く〜と在才う如〜 冥 祭
冥柩や昏く由くと前子あへ
幸かま〜と女子ハ姉〜を冥了り
り〜とハ我命を〜 玉才利
ほ山小来才〜て淋〜た才祭
果菓あ〜小押合あ〜冥了り
言は世や草〜と此著の長鏡
冥柩や石は〜と佛あ李
霊柩蓮乃葉風や紙表々
お〜と才やむ〜と〜と〜と灯籠お
在可〜と幕末を事〜 玉 祭
余才〜と秋夜居る古き玉祭
慟乃〜と〜と〜と〜と〜と
冥柩や眼〜と〜と〜と〜と〜と

負室 季吟 嵐雲 負依 心徑 蒼狐 也有 平破 宝馬 津富 雀舟

存我 小知 差母 不古 萬言 蒼兩 津寓 公曳 芭童 柳童

水くささの海や玉内片利
 山急よ碎けてけらるる多きふふ
 望不言

望柳やのりしそりの亭にあり

踊

空寂小あしめや余心の躍を夢
 一とく待人を逢ふをこそとてしそり那
 とそりそりや余を娘の多し事
 躍るあやや悲しむ滞の拍子あ
 かりあやや小町ととては付も
 素直あはと膝をし耳もも踊るあ
 うとく藤もわたり扇やききるあ

風尚白虎
 蓮之文
 其葉
 其川
 色皮

燈籠

冥途やろるる寺坊揚灯籠
 言燈籠昼を物うきけりら
 高灯籠荃劫記ういりりり
 寺々燈籠坊の秋のそり急が
 昼はくく灯籠のゆき秋の風
 燈籠や先朝の月夜
 寺東の灯籠や甘身寺西近
 うとくや遠小所のこり燈籠
 灯籠やまりのにありりり
 階ゆくやまりの燈籠小釣の歌
 そりりやほのりり姉のまじり

維舟
 千那
 負依
 春来
 津富
 不
 貫
 花
 立

いと病むる小女

娘—い花雀目やうとて初燈花

百苗

花火

中より人の律美か入申ら花火が
こころをせて花し御美あておちか
咲きりいちと煙はけらのそのあか
さくくと物りか花の玉火うれ

蒼狐 春那 左扉 標舟

あさる

朝うやよせ—の万まてあしき
あまの月や夜を明きさる—その又
朝うやまもゆく乃花の出未
葉の志やめりや思を又あけ皺

不磨 史邦 枚風 秀朝

朝影やいりの夢う—二之こん
あまの月や夜を明きさる—その又
朝うやまもゆく乃花の出未
葉の志やめりや思を又あけ皺
朝うやよせ—の万まてあしき
あまの月や夜を明きさる—その又
朝うやまもゆく乃花の出未
葉の志やめりや思を又あけ皺
朝うやまもゆく乃花の出未
葉の志やめりや思を又あけ皺
朝うやまもゆく乃花の出未
葉の志やめりや思を又あけ皺

沾津 曲巷 心狂 蒼狐 石絲 依保丸 不知仙名 亭々 春那 存哉 雪高 望母 乙雅 危言

あささ甲や若くしとつと別々
細白の髪髪もさうれ凡々
中半花の花の命や別々
うささや月一蔓も陰ひあさ
葎 雪、画小

仙木里
唯丹月
芭蕉

木 槿

槿花一玉川と咽めさゆか
及りの木槿ハ馬小舎ささ

空存
芭蕉

蘭

紫の香や及るぬ人こそささ

心 祖

物お夢ハ狭き小ころ中
蘭 極々馬髪みささ

宝馬
木丹

画賛

紫陣や一同小うりさ 白小 家

不 言

萩

古は木の尾着るやささ
初見小吹ささされつ萩の花
ちさ萩とさささ枝のうさ

宗 臨
玉 之 圃

女 帝 花

さささくと松露さや女帝花
さささく笑さぬやとささ

芭 蕉
波 芭

伯承の意ゆき悟しとて
いふはれは向うを男を
我は小中や低けて女
吹かす心の多しとて
女帝花蝶ハ棠程の夢
余の心もれは女帝花
朔風や立訊しとて

白 蒼 涼 蓑 蓆
狐 狐 依 太 希

桔 奴

あさねの羽ふねくれぬ
手らわりの花さかや

貞 知
平 砂

秋海棠

秋海棠西山の鳥小
羽ふねの秋海棠

芭 蕉
和 前

鶴 瓦

ささひのを仏小
鶴瓦や夕日の語を

野 波
芦 英

瓢 瓠

瓢尊や定を極め
三界唯一心

吐 風

百せうや夢一糸の古
千代尼

千代尼

蓮寧志

蓮の實や花てしけり池の中
蓮乃実ハ塘々もあつたる也
尺 卅
本

釈迦如来

蓮の實は花より事なる華也
四 室

蕃椒

其り子木ももちしけり
其くてもつさよのそをうし
一畠人思ろしやたつし
もさどににせさ秋や産うし
梅 翁
六 窓
笠 傘

西瓜

西瓜くふは瓜を安きう系ふれや
渾沌の言や西瓜の月利ふ也
山 角
賊

残暑

秋もすこし胎居りくる暑う非
桐の葉も中くもあつた
虫干の残る暑うや残る
乙 由
知 行
風 踏
合

秋蝉

蟬啼や七月前の帝季
日くくくくや日をもれくく苦痛し
入桐をほくくほくくし 秋をくし
日冬くくや日の浅初秋桐柳
暮もくくも暮もくく小迫くく秋の蟬

羅朝人
五百萬
五連萬
白龜

蜻蛉

を山や蜻蛉ほい申すついで
蜻蛉の蟬をわくくく西口くく形
くくくくや花をくくてくくくく枝
蜻蛉や花をくく枝をくくくくく
くくくくや花をくくくくく細く
暑す日の今くく陰やくく蜻蛉
くくくくくくくくく日和や蜻蛉

秋の坊
古荷
延波
柳居
吳龍
雀舟

とくくくくくくくくくくくくくくくく

津富

虫

十いりり飼てくくくくくく出の
行なれけけけけけけけけけけ
盆造て青園くくくくくくくく
道虫細い所と啼くくくくくく
けけけけけけけけけけけけけけ
虫くくくや突くくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
月の真し虫をくくくくくくくく
朝をくくくくくくくくくくくく
今更くくくくくくくくくくくく

貞室
鬼貫
万子
来山
延波
梅壽
北平
曳尾
露水
帷月

花のあけ葉のしゆふ楽む

虫撰

朽きれ機残すこと一むの多 貞室

蚕

まむ月や蚕をまむまむりく
年号れそ多しわむりく
灰け桶の京やまむりく
赤貝くくくくくくくくく
居風名し物入れてあ利 蚕
暖や灰の中くくくくく
月の夜や一石小くくく
崩すけあのおくくくく
まむや蚕の月介すくく

只むとく 啼や 赤家のまむりく 木丹

扇團扇並

風の急い忘れ並しぬ扇う那
扇並夕霧とふれは互侍や
白列くくくくくくく
居居せ一人とくくく
舌や楽扇し並くくく

稲書

稲つりや稲を歩くく 網乃 音
くくくくくくくくく
稲書くくくくくくく
不素 立 圓
角 秋 圃

稲穂子や園の澆一物かけん
 いふは子や波谷の浴をづの外
 いれは清白く一秋の夫ウをわ
 稲書や碑けて秋の物あそん
 いねつやや夜舟礼の時明り
 稲書や金糸ほつる雲の袖
 伊奈書やそく書と彦の書もせは
 稲書村彩や警く仲のいろ
 いれは清白く文字なる扇端まで
 いや津了や十は坂中の人あを
 稲書や建一して七破も原子
 いや津了やわかしこと心ほくそ山
 稲書やちく書と池の水融
 秋もそく稲書ふく川夕子外
 稲書やうらふく湫乃うけ不

水花 春來 田寬 來北 吐井 曳井 左一 寬花 芝存
 花來 社廉 道平 風風 尾尾 鼠鼠 之之 跡跡 水水 義義

いふは子や園の澆一物かけん
 いれは清白く一秋の夫ウをわ
 稲書や碑けて秋の物あそん
 いねつやや夜舟礼の時明り
 稲書や金糸ほつる雲の袖
 伊奈書やそく書と彦の書もせは
 稲書村彩や警く仲のいろ
 いれは清白く文字なる扇端まで
 いや津了や十は坂中の人あを
 稲書や建一して七破も原子
 いや津了やわかしこと心ほくそ山
 稲書やちく書と池の水融
 秋もそく稲書ふく川夕子外
 稲書やうらふく湫乃うけ不

百萬 仙里 玉玉 玉玉 玉玉 玉玉 玉玉 玉玉 玉玉 玉玉
 秋方 一音 五梁 百挂 百挂 百挂 百挂 百挂 百挂 百挂
 芭蕉
 白洪 白洪 白洪 白洪 白洪 白洪 白洪 白洪 白洪 白洪

稲

如是我聞
 或智徳のまじり

早稲の香や系湯小吹こむ朔朗
満くて畔こ申る 稲の穂波外
伊波静う小稲の 実入一う旬
移航を虫言あり 申入ロうけ

涼 体
素 山
寛 之
雀 舟

麻 笠 鳥 笠

新くく着せてもそよひが
仮初の襟斗也こりたと
田舎子も細工人らを鳥おと
両風く老てまなくか

左 簾
津 宣
玉 圃
素 登

雨 踏

白音やさ分列りも並と

梅 翁

白雪や浮世一分 五重ほし
朝霧や折小るうりうりの山
毛くつ申や可りて枯一えて葉
満る時着て足とや 叶乃露
朝ハ月小赤珠るう人輪り露
ほほけそめて凍一音乃玉
ろく露や何風へてし叶を系
りく野の高小丘へ白を
白音や起列れ行妹う
鈴舌や人の城塚乃玉 第
虫の音を盛らげて危うさのつ中
法乃高瓢箪秋く小又流ふ
片陽や高澄くさ芋をけ
降るハ常年ると高の力うか
思葉して葉をくられく叶の音

柳 茶
肅 山
蒼 狐
龜 成
百 童
素 盈
存 義
百 萬
笠 毎
不 言
雀 舟
沾 涼
空 馬
津 富
花 馬

羊の角はくまの人の足とて

木丹

雲霧

鈴音や何となくの 鐘の
二月も小からぬものど 津田村音
鳴て行霧地帯 左 津 島
霧啼て里浅 昔歌や 霧地海
川霧や あゝのまじり 馬の息
旁に 夜の州を 霧れ 禁が
三つと 海の遠方 渡り小舟は
鈴きりや 地流申く 霧は 嘆き

箱根

、宝、北、倉、乃、心、祖
馬 平 狐 翁 祇 空

相 撲

邪もは 位子 甲 龜 角力 子
上も 不と名 優 災也 角力 取
角力 取 並 ぬ や 林 の か 飾
怪 け あ 取 男 々 勝 一 角力 小
負 角力 名 の ろ の ろ いう とも
倫 言 ハ 汗 乃 へ 一 の や 相 撲 取
揚 物 不 して 静 じ じ じ じ じ
猪 角 力 取 小 乃 々 花 其 取
関 角 力 人 間 乃 々 乃 々 乃 々
子 と 抱 へ 行 司 小 乃 乃 乃 乃
夜 角 力 や 乃 乃 乃 乃 乃 乃
引 分 け 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

蛙 左 李 存 公 吳 花 心 正 村 嵐 其 本
走 簾 克 義 曳 夕 雪 祇 芳 種 雪 角 来

羊の唇よりかき人の尻をくさす
白交やそ名ハ園の引わり秋

木丹
平砂

霏

霏霏や何とそるるる 霏の 海
み月も小かられぬものと 淋田地霏
啼て行霏地帯 在 淋 滂 島
鶉啼て里残 昔 或 や 霏 地 海
川霏や あゝりまゝりゝゝ馬の息
霏 ー 夜の叫こられゝゝ 蘇 哉
三 中 ー 海の遠方 漕 行 小 舟 亦
鈴きりや 時 汝 申 々 馬 吐 々 々 々

直空
心 祇
乃 翁
蒼 狐
北 平
宝 馬

相 撲

那もも位子 ー 甲 龜 角 力 子
上 子 不 と 名 也 優 美 也 角 力 取
角 力 取 並 不 や 林 の か 々 錦
傍 け ぬ 取 男 々 勝 ー 角 力 亦
負 角 力 名 の ろ ろ の ろ 々 々 々 々 々
倫 言 ハ 行 乃 々 ー 々 々 々 々 々 々
陽 物 不 ー 静 々 々 々 々 々 々 々
猪 角 担 不 小 々 々 々 々 々 々 々
関 角 力 人 間 々 々 々 々 々 々 々
子 と 抱 々 行 司 小 々 々 々 々 々 々
夜 角 力 や 不 々 々 々 々 勝 せ 々 々
引 分 れ ぬ 撲 や 不 乃 々 々 々 々 々
と 不 々 弱 々 強 々 容 負 投

本 来
其 角
嵐 雪
村 種
正 苦
心 祇
花 雪
吳 夕
公 曳
存 義
李 克
左 簾
蛙 色

夜角力や五つ（片名）と月又山
遠余は小抱角力此笑教（う）由
大物と大國（う）里也（う）冥角力
天地に心を運ぶ（う）ま（う）い（う）非

如雷
平破
津富
花源

八 翔

八翔梅

八翔や我（う）不（う）教（う）出（う）寸（う）ひ（う）交（う）の（う）花
香（う）中（う）林（う）も（う）今（う）宵（う）俄（う）（う）一（う）周（う）の（う）梅
八翔（う）や（う）又（う）其（う）れ（う）一（う）府（う）の（う）い（う）出（う）

起波
羅人
左扉

鷓

一（う）鷓（う）ハ（う）ハ（う）チ（う）ウ（う）尾（う）も（う）向（う）き（う）鷓（う）ウ（う）れ
海（う）菜（う）を（う）洛（う）外（う）と（う）ふ（う）け（う）る（う）鷓（う）ウ（う）も（う）

貞徳
仙法
（う）

粟の穂をえよ（う）呼（う）や（う）啼（う）う（う）つら
かい（う）し（う）く（う）と（う）し（う）ら（う）も（う）床（う）を（う）乃（う）鷓（う）か
困（う）懐（う）と（う）啼（う）う（う）ハ（う）鷓（う）の（う）丘（う）（う）ハ（う）鷓（う）
妙（う）や（う）花（う）の（う）千（う）（う）枝（う）を（う）と（う）あ（う）（う）鷓（う）
色（う）と（う）も（う）小（う）お（う）と（う）ろ（う）（う）鷓（う）の（う）鷓（う）か
初（う）声（う）も（う）た（う）も（う）ひ（う）切（う）（う）鷓（う）の（う）形
今（う）起（う）し（う）（う）名（う）と（う）ま（う）（う）ら（う）（う）か

支考
琴風
蒼松
花雪
花露
意得
崔希

鳥

小鳥返

己（う）の（う）名（う）の（う）口（う）（う）（う）と（う）や（う）泣（う）（う）初
ひ（う）鷓（う）乃（う）風（う）（う）（う）れ（う）（う）繩（う）も（う）か
鷓（う）鷓（う）よ（う）（う）い（う）（う）川（う）死（う）（う）水（う）の（う）と
川（う）（う）（う）（う）（う）（う）（う）山（う）（う）乃（う）南
む（う）く（う）（う）の（う）雲（う）と（う）群（う）（う）夕（う）（う）（う）

未得
旧室
祇徳
梅寿
貞川

是松やまゝりり小島残杖の色

吳市 龍仙

雁

是詔や平砂の雁乃みちり書
酒罎小申く死兩夜の雁むと川
雁少て又一處入まゝゝ夜うも
湯舟鳴あけや雁成はるき
油灯小天井但し一夜の雁
油然てまゝ干ぬ多やまの雁
初雁や並て少くは結以事
水影や声返る雁成なおりひ
雁啼やあ乃ろろ徳沈む時
湖や一眼小田と芦の雁

正重 其角 兩桐 貞佐 春來 佑保 千代 栗堂 貞知 龍昇

雁鳴く心も秋小定て
親子せとまゝゝしりり雁の声
初雁や並て少くは結以事
雁啼や聲返る雁成なおりひ
湖や一眼小田と芦の雁

煮行 吐風 曳尾 津富 雀舟 百桂 太布 技群

木 危

木危や切り切らるる昼の白
み川くやま抄歌のかきの上
木危よま向あゝし秋のくれ
木危の島の嫌い小畑も危

芥鏡 龍翁 花菱 素玉

鹿

いいと啼尻色かひりー夜の麻
草の山をさうと麻のすくくか
啼麻と根の本の方かえんを
遊とそ尾と小すくじ麻の声
麻の音に人の歌えろ夕アか
啼らりも不巻ー麻の成る時
麻の色心り角かひりりり利
鹿乃尻やりの麻ーくくくく
麻のまや麻をぬ一夜二夜三夜
八月小麻をぬくぬぬぬぬぬぬ
湖の岸の外小麻をぬり麻の声
アアアアと夜のりりりや麻の色

ろろ残
そ角
公来
北枝
一髪
直水
乙由
立志
百例
馬光
千代尼
蒼狐

月に連て世昇る声や峰の麻
夜山風にを交ふくくや鹿の夢
柔山此ねくそす申るそろ声
事足ぬ女麻の面や多の音
小窓ハ寒けと通ー麻の多
眼かえ申るものうり多れ麻の多
人列ー麻さるるるの夕アか

亀文
春邨
宝馬
玉圃
乙外
素月

新酒

除穢麻

我りり新酒ハ人のこめや生
流くーて君子の味乃新酒か
くは勿きと乃くはりの先濁り河

鼠雪
呉夕
夢太

秋風

秋ふ安れ口志似ほくや萩の音
わくくといはほもかしく秋風
龍風の吹きくくも色人の旅
十重子し小粒小くくや秋の風
ちうくくや麻刈法のあはの風
かつくくくともあゆむら菌や秋の風
ませゆ紫々いりくくくくや秋の毛
後あてや背小くくくくあはのあは
秋風や象馬髪乃持くくくく
西風やいそ自力の扇はくく
塙し動け我泣くをを秋の風

西本頼季より

俣

季吟 芭蕉 評六 紙人 秋風 器通 專吟 雅郊 梅翁 芭蕉

野合

野合して鹽小あときく
小系女や野合に命ふりく
艸茂木も人の多あはあはが
むつくくくくくくくくくく
あはあはあはあはあはあはあは

古

芭蕉 園女 羅人 栗堂 岱

花野

あはあ

あはあああああああああああ
あはあああああああああああ
あはあああああああああああ
あはあああああああああああ
あはあああああああああああ

公由 杜谷 乙推 素推

西 資

杜の舟や小田の掃雪は

蒼 瓶

宇治花園

花屋や舟とてしはれぬ事

そ 紫

芭 蕉

いづれ雪のふせは十月夜
舟の帆は舟のふせは
ふせは舟や老て小町
しづ月の芭蕉とてしはれぬ事

と

三 信
一 晶
群 雀 長 郎

薄 尾 花

たししらす色ふとては

鬼 賈

波蕨中の林にさすはる
八月の月影は花郭くし
花屋のたきとて道や花
ひし舟や月の東玉の花
吹くは吹風の舟は
舟は舟と夕舟は
舟は舟の綻いて色い
徳不出て舟を舟は

牧の舟は舟は

弱舟や牧の尾花の波舟は

嵐 雲
不 角
春 郊
涼 山
芝 水
雀 舟
宝 馬
ト 人

世 虫 の 穂

芦の穂や舟は舟は
芦乃穂や舟は舟は

文 州
鼠 雲

梅 嫌

残る葉も枝もはらばらと梅嫌
梅もさき月も葉もさき梅嫌
白く月宮をわらわさき梅嫌

放生會

魚もあつらひ笑ひむ放生會
鶉も射てし捨てし放生會

月

皆人の憂病の種や 秋の月

貞徳

月やあつらひ我牙二つを乾法師
いふかゝ花もさき月一輪
閑もさきさき月一輪
又さき月をさき月一輪
月や人の心をしれり 茶も此
十日あまり三日月をさき月一輪
鯛ハ花ハさき月一輪
又さき酒の母りけり
秋さき月夜馬ハい川も
月ハさき月をさき月一輪
さき月や芳の道ハ此の浦
をさき人を休む月一輪
あの中ハ花をさき月一輪
月さき月をさき月一輪

梅翁 貞室 仕口 向加 童方 西雀 鬼貫 芭蕉 徳

川て後ととくも田毎の月えか
 名月の水也ほほりり月の月
 名月や何はそこの端小ありま
 名月や錦とこの夕夕利
 月いり川とてあつひや水車
 名月やあふふりり魚の店
 眼乃先かむとつ返る月えか
 世と病と志中不いり月夜か
 名月ハ秋ふりり一夜うね
 若書れえり書るり月と書
 西行と花小死にりり月の月
 名月乃休めや言れ水
 月と書我宿りり家と客
 名月や夢女とむと書お書き
 名月や本菜と書新のりり

桂坊 渭北 田室 貞屋 蒼狐 山 貞磨 依保丸 栗堂 梅郊

名月や今宵乃とすりり
 照りつと心地を但し後の月
 こわれりりせしこりり月と書
 強りりり書と月乃夕甲か
 夕書れれやええと後の月
 華と完うむ程の月夜りり
 夕月やあつ夜ハ長の本と此書
 鳥啼夜のそりりやりり月の月
 月今宵浪獨老と書と書りり
 名月やこりりれりりねの書
 名月とつととありり月夜か
 月えとや月えぬ人の書りりり
 名月やあつ月小福の書と成る
 名月やあつと此鳥の書りり
 折るれりあつや福のりり月

梅書 貞知 雅邦 寔藤 素藤 吐風 曳尾 北平 沾菟 吳言

大と麻猫と巻やまふの月
いさよりのやまのあかりの月
夜交人馬川まつと後の月
物たりあ月とやあしりの月
稲刈ては足伸馬や門の月
新しや月の今宵の牛の巻
名月やうらゝい巻と眼のあし
名月や古き秋吹の胸のま
古川水の水の糸きやほの月
名月や子麻拾ひと陸乃り
月満りて君と人まうくん
名月や州田乃茎や後の月
名月や州らぬ氷ゆらぬゆき
あけけし尾花や後の月
月あはれ一枚の糸あはれ

存 茂
た 簾
何 糸
素 角
平 苧
不 言
糸 人
維 嫁
十 教
乙 外

とれむと申月の長きと肘抱
米落つと鳥とりりあむ月と青
とら申くうりりの巻や三條の月
夜の巻也 名月水戸を叩く巻
名月やかしら影の巻と琵琶法師
名月と月あはれ巻や夕化粧
月出く巻とやりの巻と糸の巻
鶉の巻とあまにうらや後の月
いさよりのやに隅馬さう月
十五夜小出と月と七十三夜
十四夜
聖満て聖のけし月のりふと
月とあはれ月と巻とあはれ
何の本とあはれと巻とあはれ

群 長
宝 馬
津 富
把 菊
聲 秋
花 糸
雀 舟
百 菴
鬼 貫
平 破
何 何

中秋の月

更えらばし 稿書 不しふの月 寂 得
関羽賛
 佈し 鬚毛 徳小出て秋の月 四 室
十二夜
 前小晴川 危のほの長月 平 羅 人
羈 詠
 今列し月も 小夜の空布山 素 芥
長月半の夜月 雲家 賦 藤原
 し 雨や 影し 月半 何 来
松原の信九郎 述と三系
 松島毛 夜人や世と 詠の月 皇 妹

礎

礎とく 籠とく 奥水 菴 涼 菴

柳子木乃 從城外や 小夜 懸
 麻よ 流病ふ 宿の 宿ふ
古
 梅に 宿りて 宿の 宿ふ
 流し 宿りて 宿の 宿ふ
 宿の 宿りて 宿の 宿ふ
 一宿 二宿 宿りて 宿の 宿ふ
 月よ 宿りて 宿の 宿ふ
 秋よ 宿りて 宿の 宿ふ
 宿の 宿りて 宿の 宿ふ
あり 長き 宿りて
 中の 宿りて 宿の 宿ふ
宿りて
 宿の 宿りて 宿の 宿ふ

柳 懸 柳 宿 柳 宿 柳 宿 柳 宿 柳 宿 柳 宿 柳 宿

菊

芙蓉よりさくそ外の香るるが
山踏の菊の菊も又退じり
意もゆら菊又あまら額 綿
上白の菊も秋もや菊の花
長生の時くそまはま久の花
忙のよて柄の言ひくそこのを
菊の芙蓉の菊も秋もや菊の花
かくきさる菊も秋もや菊の花
大輪小菊も秋もや菊の花
うしろの菊も秋もや菊の花
菊の芙蓉も秋もや菊の花
秋の菊も秋もや菊の花
菊の芙蓉も秋もや菊の花

鼠
越人
野波
青
木
涼
峯
栗
貞
龜
新
昇

合意の菊も芙蓉の
並意の菊も芙蓉の
白菊も芙蓉の
菊も芙蓉の
弱己の菊も芙蓉の
白菊も芙蓉の
酒も芙蓉の

重陽

八重菊も芙蓉の
老菊も芙蓉の
菊も芙蓉の
菊も芙蓉の

公
史
一
吐
色
裡
何
来
二
蒼
本
丹
水
狐
瓶

山口雨晴

子とらゝいひ人

望ふもく徳既るても葉えても

四十

年改葉おちるく成小龜

京

蚊

足

まけらるもえりふりや葉合せ

心

徑

西語

福しひ考熟乃襟毛やみくれ葉

素

行

栗

とんがり

栗栗吐る下死りり石佛

栗栗吐る拾ひと笑ひ加ゆ

栗栗吐る怪しくも笑熟し

栗栗吐るやま出小家此別行け

青雲

芝風

紅葉

稲妻の差をゆえと也初紅葉

暁澄乃樹のぬ比やゆゝ紅葉

うきうき川や一入馬後の世紅葉

朝紅葉乾つたやうに地波し

村のち先木乃こゝろせし葉

法身みち再い葉る山踏うれ

貫白

律迄李橘蒼

太龜皓富橋趙川狐

葛

淋しさのと塗しと壁れ苔

草

吹

あもや、萬乃候、ちと垣根、
かみち、小色、苔の細、
月、細く、

梅 邦
雀 市

枯尾花

恐、く成て、入りや、
又、ま、く、原の内、
枯尾花、

魚 日
蒼 狐

秋日

穂の空、富士を、
上申、く、と、下、
秋、も、ろ、や、
板、葉、や、
秋の空、
尾、
の、
枝、

尺 兆 波 指 角
ト 凡 野 落 毛

秋、も、ろ、や、
板、葉、や、
秋の空、
尾、
の、
枝、
病、後、
心、し、
虎、
西、
脚、

大 軒
貞 屋
栗 堂
杭 水
百 桂
支 考
梅 郊

禮夕

祭、ぬ、く、
あ、ま、
枯、枝、

一 軒
一 路
芭 蕉

さうらひけ秋も淋しき秋の暮

芭蕉

角力とくくふくくく秋のくれ

尚白

稚子やむくく飯くく秋の暮

尚白

秋夜

くくくく唐茶も秋の病美
秋の夜を歩めくくくく
長子水と云氣を移して旅病か
初夜と云くくくく秋の暮
秋の夜を歩めくくくく
くくくくて寐くくくく
未だの暮やゆくゆく人の膝

梅芭蕉
来鬼芭蕉
荷今山貫芭蕉
胡及今山貫芭蕉

うき此夜や秋と極戸のむくく
芭蕉葉乃地くくくく
穂の夜を知くくくく
風雲や月小字子の言り
簾瀧のいとくくくく
雨雲や屋瓦の秋の暮
秋の暮や踏小院望むくく
待恋

岩前
芦池
平破
玉圍
百桂
其統
田城
橋川

夜寒

入野の巾襖分る夜寒
新燈小蟬の遠小
病言いふくく傍の暮

芭蕉
梁山
梅山

あまのこゝろを定まらばや犬の夢
耳すの味は定まらばと知る夜は
川面小楫の声の夜定まらば

雨中吟

春郊
玉圃
仙化

秋雨

芳のつら尾をうりのよしのけ
むら雨やしの毛汗ととも秋の心
あゝくくく河原乃秋の日照る
相の紫くく耳よりや秋のふれ音

古
一 祖 羅 貞 子
巴 德 人 山 角

露時雨

推の紫小盛はまてや露時雨
菊の香乃物小はくもや露時雨

南 羅
希 因

混合

軍場を嵐小遊不川 朱葛系
着小すと人小泣く人 暖蔵の袖
こせ初や角を髪はとよめ
芋の紫や小玉に袖を合せ
くけ飯味はく髪を荒く色
二百十日一雨をくくくく
夕影や秋を前小乃せしれは
蓮や雨のくれくれ子
木樨乃花の香はくあま
太刀魚や水くたまはくくく

季 吟
梅 盛
交 考
夕 市
心 林
七 里
乙 由
涼 依
春 郊
龜 文

くもしかりと嘆や秋も花の中
むき續く海の成嫁や彌雲
唐柜や田舎とて柴も必深
淋しきや多小出てせかひに
月州もロめ出ぬうらの縁の
月影の田にまろせも
推の、実や十日く沖雨乃
を川ゆきとさうと鳳仙花
多小啼やかかりも水のあはれ秋
久しき小形の狂ふや秋茄子
料肥端の夕棠や今そそそ
青利市や花の帯しる雨の味

大津西鬼の三法

さきこもも次一虎と猫乃皮

紀亮 来道 北平 花城 素盈 孤舟 左簾 把菊 存義 百万 伯幹 津富 羅人

秋 雜

飢し居の命と捨小 蒼穂外
涼小虫に月一 花野の乞食外
おしい命小化うか滅や酒と兼
萩ふらふ今とや 月乃花危
弦をせい野の花露よ 秋の虹

北國の柳の比部も栗科とよりの作やうと
こすのとこいさるに

玄、扎 蒼、孤 心、狂 公、曳 卒、砂

邪もや西雲の粟田や じえの秋

文考

横西 賢

柳くとしくも 王母の園小盗とて

旧室

悼

ちくこかす茶もえれ 菊の影

崔舟

牡丹 伝

萩の花 葵の枝 の方や 女帝花 百 菴

暮 種

行秋やよと廣けし西粟のい
申く河津の通く山乃江紅葉の
秋もこや河津のふき先のきりく
りふのこゝ秋のありつゝ秋
日くれ秋の秋や又おくる峯の麻
夕暮とほしき九月三十四日
行秋や大根白き京の川
端の秋乃山際を夕アくれ
鴨川のふし一舟ふ申くや妹
り妹や烟にほくかつと電

芭 乙 心 柳 花 花 花 花
菴 由 徂 口 口 口 口
花 律 室 丸 花 菊 柳 心 乙 芭

林一と今又名は善の妹
何むと川波如日和や善の妹
古いり利根の善きとくしの秋
春其と別登とくくも秋

松 漁 行 木
家 光 丹 丹

誹 諧 古 今 句 鑑 槐 之 部 終

萩の花 葵の粉の方や 女帝花 百菴

暮 種

行秋やゆきと廣げきき 粟のいり
申くつきの通く 赤いれ 紅葉の
秋もこや ちりり ちりり ちりり
りよのこゝ 秋のりり 秋のりり
日うれ 行秋や 又おとく 峯の麻
夕暮とほりり 九月三十四日
行秋や 大根白き 京の川
蟬 啼る 斧も 朽る じ 九月
行秋乃 山際 ちりり 夕アうれ
鴨川の ちりり ちりり ちりり
り 妹 や 烟 ちりり かつと 電
花 津 室 丸 花 鶯 柳 心 乙 芭
露 富 馬 室 跡 口 垂 徂 由 蕉

淋しき今又名残 善の妹
何むと川 赤いれ 紅葉の
古いり 利 紅の ちりり ちりり
春 暮と 別 昼と ちりり ちりり
木 行 漁 松
丹 磨 光 架

誹諧古今句鑑 種之部終

秋之部

一陽井素外

今朔秋乃立伸て色艸の蔓
 初月の梧桐の落葉井を子候
 たり秋とくころ月夜や三四徳氣
 又初月の卯月の比よらあめ川
 糸にまらりの光夜明の銀河
 靱あはれしりも暗き星の悲
 川城を禪子向よ星あふい
 近火や客ハまはらし乳は師
 冥柵や誰う城を疎の緯の天
 靈祭書の悪瘵もも何せて

秋の部
 一陽井素外

せりちに清くさう色盆の月
 只句ぬ踊くの申あるられ
 秋もさう女子柵子や盆とさう
 葦や窓記もさう子々思眼うの
 あさうの別々柵さうあう色
 蘭の色をさう人小句いさう
 庭小さう旭や蘭の新法い
 ぬさうさうし思さうあの新
 強うぬ中ふちうや凡の新
 秋りさうさうさうあ暑うぬ
 さうと際小盆し遊さうあさうぬ
 虫物や節提灯小萩もさうぬ
 さうさうさうあさうあ係さうぬ
 明神のあさうさうあさうぬ

信よりかきしと肥せ福の香
白駒やまてまきし一帯の
もろくろかきしと福の香
笑ふはよ形無生心一帯の玉
赤子の世の形や角力中
角力行ふ人小拭せり
日と入る奇難なる中
川世の中直る中又申る後
子と女と思ふくは厚の
厚味やは乃流初病ら
里をくは申る中細の
味麻の夢行く宿小雨戸
淋しこのかきしと申る
白雲の波吹かす野
朝露の金明干柿も花野

花野をみし月の小川
一帯のなやみ凡象の脚
之より中芭蕉は破も足
あきかきしとまきしと
風をや野小流しと
後秋の上戸中亀種
日中西小流しと
月と中隙を心夜の中
名月の中骨焚く人
居る中骨子の中
名月の中子の中
月の初中誰か戯る大
笑ふ夢の中中月
人志の中の中の中
第と只古の中中

あはれて荒くくしほくむと兼
移ふ又る兼のわらや八日月
あはれくも菊を静かにするは色
こころ一極を憂ふまじや花の夜
大吼るは守はまじくも
極めて峰のゆら葉心く
流のまじ逆とらわらゆら
眼小枝と信つは乃夕ア
あはれ人小怒るは色秋のこれ
何しる故もはれ申す言の枝
花の秋らるは三十日星夜
文月よりをほ花の人こそ
多事と母の文も折るは世身
いふ火や逆へぬ玉の母を千世

弟の自り母と兼

新益や少のに在せ一人を容

さめて月とては世を差うつ
雨後

月を水雲の怪小入る夜う非
陽士を訪ふおそれ

兼いさくは心易るはこれ
田家

そのくを稿穂ちるは庭の兼

長き夜や寝てを互りらるは
萬句息子の沈子

番祀や一色万人とむらう日





